平成九年三月一日発行（毎月一日一回発行）

經濟論叢

第159巻　第3号

哀　辞

故小野一一郎教授遺影および略歴

異動をめぐる労使協議の変遷（3）……久本憲夫　1

「ブリティッシュ亜麻会社」の事業展開（2）…林　妙音　19

児童労働に関する経済学的諸議論の検討……石井一也　34

中国のマクロ経済政策スタンスに関する
　政治経済学的アプローチ：実証と理論……鍾　非　54

1950-60年代日本自動車工業における
　技術導入過程の史的数量分析（1）……矢野　剛　72

追憶文

小野一一郎先生の学風……本山美彦　94

小野先生の仕事と「雑談」……松野周治　98

学会記事

平成9年3月

京都大學經濟學會

【学会記事】

ミオッティ博士講演会

京都大学経済学会の特別講演会が，パリ第8大学助教授の Egidio Luis Miotti 博士を迎えて，1996年7月28日（日）午前10時から12時に京大会館で開催された。ミオッティ博士はアルゼンチン出身で，1991年にパリ第7大学でR・ボワイエ主査のもとで論文 "Accumulation, régulation et crises en Argentine" によって学位を得た。今回の講演では，「アルゼンチン経済のレギュラシオン分析」と題して，アルゼンチンの工業化の進展を時期区分し，その各段階における蓄積体制とその矛盾を説明した。レギュラシオン理論の南米経済への適用として評価できるレクチュアであったが，時間不足のために，低開発経済の特性の認識やペロニスタ政権時の工業化の矛盾についてなお論じたりないうらみが残った。名古屋市立大学の井上泰夫教授が通訳を勤めてくださったことに感謝します。

（八木紀一郎）

シェフォルト教授講演会

フランクフルト大学の Bertram Schefold 教授が学術振興会の招きで来日し，京都大学でも1996年10月4日（金）の10時半から12時半に第12演習室で「ドイツ歴史学と倫理的進歩への信頼」"The German Historical School and the Belief in Ethical Progress" と題してレクチュアをおこなった。シェフォルト博士は，結合生産論などにおいてスラッファ理論を発展させた理論家でもあるが，他方で経済学史に関心をもち，F・A・ハイエクとH・C・レクテンヴァルトが始めた経済学古典復刻シリーズ（Klassiker der Nationalölokonomie, Verlag Wirtschaft und Finanzen, Düsseldorf）の編集を引き継いでいる。今回は，歴史学派の再評価がドイツをはじめとした各国でおこなわれていることに鑑みて，歴史学派について論じてもらうことにした。シェフォルト教授は，ドイツの歴史学派の経済学者たちは，市場経済と倫理の関係についてのアダム・スミス的解決

には満足しなかったが，教育・文化，そして国家的指導の要素を含めて大局的には経済発展と倫理的進歩の並行性を信じていたと論じた。これが資本主義の弊害を説いた社会主義者と異なる点であったが，第一次大戦からヴァイマール共和制を経てナチス期にいたる激変期にこの信頼が失われたことが，この学派を衰滅させたのである。こうした評価は，歴史学派を広い意味での近代化論者とみる現在の動向に沿ったものであるが，国家的指導や教育・文化的要素のあり方をさらにつきつめていく必要があろう。なお，このレクチュアは，経済学会の特別講演であると同時に，経済学部の特別講義，および，大学院経済学研究科の博士後期課程「理論形成史ワークショップ」としても指定された。討論などについて，ドイツ語に堪能な四日市大学経済学部の原田哲史助教授にご協力いただいたことに感謝します。

（八木紀一郎）

プリダット教授講演会

シェフォルト教授の講演会に引き続き「理論形成史」のレクチュア・シリーズの第2弾としてドイツのヴィッテン・ヘルデッケ大学の Birger P. Priddat 教授の講演会が，1996年11月15日（金）の午前10時半から12時半にかけて，第12演習室でおこなわれた。プリダット教授は，シェフォルト教授とともに現在のドイツ語圏での経済学史研究の復興を牽引している研究者で，最近は力作のシュモラー研究を公刊したばかりである。日本の経済学史学会が歴史学派を共通課題としてとりあげるのにあわせて，学術振興会の招きで来日した。京都では，「ドイツ経済学における主観的価値論」"Theorie des subjektiven Wertes in der deutschen Nationalökonomie" と題して，カール・ハインリッヒ・ラウ，ブルーノ・ヒルデブラント，アドルフ・ヴァグナーなどを取り上げて，財に対する欲望という視点から価値を論じるドイツの経済学者の基本傾向について論じた。

カール・メンガーの理論もこの底流からその価値理論の洗練化として出現したのである。このレクチュアでも，四日市大学経済学部の原田哲史助教授の協力を得た。歴史学派の政策論の再評価とともに，こうした理論についての再評価が進行しているが，それが古典派主軸の経済学史観を崩すかどうかはなお未確定の興味深い問題である。経済学史学会の年次大会でも，小林昇名誉会員はこうした再評価の動きに挑戦される講演をお

こなって，学会の緊張感を高めた。シェフォルト，ブリダット両教授の歴史学派論は，経済学史学会の共通論題セッションに参加した研究者の論文とともに，1997年中に日本経済評論社から，住谷一彦と筆者の編集で『歴史学派の世界』として刊行される。

（八木紀一郎）

ホジソン教授講演会

ケンブリッジ大学の Judge Institute of Management Studies のレクチャラーである Geoffrey M. Hodgson 氏が来日し，1997年1月17日（金）の午後1時半から4時に京大会館で講演をおこなった。ホジソン氏はスラッフィアンの立場から政治経済学を構想したあと，制度学派経済学の再興に転じた理論家で，その著に Economics and Institutions（筆者ほか訳『現代制度派経済学宣言』名古屋大学出版会）などがある。京都大学では，理論形成史のレクチャー・シリーズの第3弾として，「進化経済学者としてのヴェブレンとシュンペーター」"Veblen and Schumpeter on Evolutionary Economics" について講演してもらった。このレクチュアでは，現在のエヴォリューショナリィ・エコノミクスの理論家たちが師とするJ・A・シュンペーターはT・ヴェブレンと対比すると進化経済学者としてはきわめて不満足であると論じるものであった。経済行動における合理性の批判を進化経済学の主軸とする場合，ヴェブレンの方にこそ学ぶべきものが多いと論じるホジソン氏に対して，分析の洗練・深化をどのようにしてはかるかという視点からの鋭い批判もあり，議論は白熱した。なお，経済学会の特別講演会の枠外であるが，2月15日（土）の午前10時半から12時半にも，再度京大会館で「慣習と規則の偏在性」"Ubiquity of Habits and Rules" と題する氏の講演がおこなわれた。

（八木紀一郎）